

初めてスリランカに訪れた1990年、設計者の美意識があちこちを感じられるホテルに泊まった。砦跡の高台、レストランからみる絶景、天井一面に施されたバティック(ろうけつ染めの布)の面白さ、何気なく置かれたインテリア等々にこだわりが読みとれた。今思えば、ジェフリー・バワ(1919～2003年)が遺した建築群の一つではなかったのかと思う。当時はバワ芸術が話題に上ることはなかったが、その後アジアリゾートが脚光を浴びるに従って彼の作品が注目されるようになった。彼は独自の着想で建築物を一つ一つ完成して行くたびに、彼独特の才能が華開いていった。彼が手がけた建築物に足を踏み入れた人たちはまるで魔法に掛けられたように、バワのオーラの虜になりうっとりと夢見心地になるに違いない。バワは世界屈指の建築家である。同時にバワによる建築作品は全てスリランカの文化遺産でもある。

🏯「大阪万博・セイロン館」はもしかして、バワの作品? ²⁾

1970年、私は大阪万博を訪れた。30才を過ぎた頃である。会場の話題をさらったのは、岡本太郎画伯の太陽の塔であった。あちらの展示会場は長蛇の列、こちらの入口は人ざかりで混雑を極め、それだけで疲労困憊であった。人の波をぬって歩いたことを思い出す。「セイロン

館」は外観がスチール枠でモダンなガラスで覆われていた。比較的空いており、とりあえず入ってみた。館内に足を入れると、外見とはうって変わり数えきれないランタンが輝いていた。ブロンズの菩提樹も置かれていたと思う。その程度のおぼろげな記憶でしかない。が思えば、ランタンこそスリラ



ジェフリー・バワ設計の大阪万博セイロン館。
(エキサイトブログより)



スリランカのウエサク祭(2015年)。
(ウィキペディアより)

ンカの国をあげての仏教行事の一つである「ウエサク祭」で使用されるものである。

因みに、ウエサク祭は仏陀の生誕、成道、入滅を記念して、5月の満月の日(ポヤデー)に行われる。各家に飾られるランタンには、毎晩明かりが点されるが、この明かりは「法の光」を象徴するとともに、悟りの境地のシンボルでもある。

明かりの点灯は光による供養であり、功德のシンボルでもある。無数のランタンが輝く「セイロン」のパビリオンは、いわば仏教国セイロンが世界の平和を祈念するブッタの心を発信しているのだ。既に建物は解体され、何処にもその証左を得ることは出来ない。然し、今思い返してみると、バワ・アートを感じさせてくれる何かがあった。

万博の総設計者は丹下健三をはじめ第一人者ばかりであるが、それらの方々と肩を並べることが出来たスリランカの建築家は、自国を理解し熟知するバワしか考えられない。

バワの透き間アート

2012年10月初旬、インド洋に面した幹線道路沿いに建つ、ジェットウィングライトハウスに立ち寄った。ゴールの北西に位置し灯台の役割を担って命名されたと聞いている。ご一緒下さったスリランカ平和寺の檀家代表アヌラ・デ・シルワ氏は、「1997年に建てられたバワのホテルですよ。バワの建築のエッセンスが詰め込まれているんです」と話された。小さな岬の地形を生かし、周辺の自然を愛する者の立場で、バワの個性が豊かに溢れてた設計とアイディアからデザインされている。潮騒の音、目前に広がる海波が砕ける力強さ、朝夕で変化する気候、刻々と変わる海の表情など、それ自体が魅力となって異国からの観光客を呼び込んでいる。然し、地元の人はこの有名なライトハウスを知る人は少ない。宿泊者たちの感動と絶賛の声広がるに従ってバワの名が馳せていったように感じる。

私は、石造りのエントランスから2階に登る螺旋階段にある、旗を掲げ行進するようなオブジェを眺めた。じっと観ていると、1505年ポルトガル兵がセレンディブ(旧スリランカ)に攻め入り、キャンディ王朝を支配するまでの歴史をドラマティックに表現しているようだ。階段の手すりの透き間を利用したアートである。

南西海岸に建てられたバワのトロピカルリゾートホテルは数多い。それらそれぞれに空間を利用したアートがあり、個性的な椅子やや東洋の円窓には珍妙な動物インテリアが置かれている。いわば透き間を利用したアートの中にはバワ独自の世界観が、潜んでいるようだ。

シーマ・マーラカヤ寺院

2013年1月、コロombo市内を車で巡り高層ビルの並ぶ所で「あのベイラ湖に浮かぶのは、シーマ・マーラカヤ寺院だよ。ガンガラーマヤ寺院に付属する受戒堂で、戒律を守り身を清浄に保つよう



西部州コロomboにあるシーマ・マーラカヤ寺院。

(ウィキペディアより)

…具足戒を受けた僧侶たちが1か月に1度懺悔する場所として集まるんだよ」続いて「毎年2月の満月の日はペラヘラ祭が行われ、装飾品を付けた象、キャディアン、ダンサー、ドラマー、アクロバット、悪魔祓いの仮装行列を観に来る人で賑やかだよ。カティナ会もウエサク祭にも大勢の人が参拝する…」と同行者の話である。

見れば高層ビルの並ぶ場所にあるオアシスのようである。先にみた湖上に建つ国会議事堂を縮小したような、水とのコラボレーションはバワの真骨頂である。1976年から1978年の作品で、伝統的な寺院形式を踏襲せず革新的な建造物である。スリランカというよりも東南アジアでみたような雰囲気がある。湖に浮かぶような境内には、短い栈橋を渡って歩く。境内に入ると仏塔、菩提樹、仏像が安置され、寺院としての機能を果たしている。ホテルには滅多に訪れる機会のない現地の人々も、此の寺院にはお参りするという。寺院の壁面は風通を考えた格子状で、神聖なきもちにかられるような作りであった。

■注

- 1) ジェフリー・バワ (Geoffrey Bawa、は、スリランカのコロombo出身の建築家。スリランカを代表する建築家で、トロピカル建築の第一人者として多くのホテル建設を手掛けた。(ウィキペディアより)
- 2) ジェフリー・バワの設計です (編集部調べ)

